# 金賞

『縞猫（しまねこ）』

# 『縞猫』

埼玉県　浦和明の星女子高等学校一年　賀来心音

少しずつ森になったその台地には、河が真ん中を突っ切ってのんのんと流れ、海原へ注いでおりました。そうしてその河の下流のほう、汽水になるかならないかの所の岸辺には、一匹の猫が棲んでおりました。

それはもう、まさるものとてない立派な猫だったのです。縞の毛並みは螺鈿づくりのようにきらきら光り、駆け出せばまるっきり稲妻じみて、素早い野うさぎもたけだけしい狼も、けして追いつくことはかないません。加えて理智も大へん働きましたから、こういった様をわざわざ鼻にかけて、ひんしゅくを買うようなこともなかったのです。

切り株の広場を通るときはにこにこ顔で挨拶し、けんかを聞きつければたちまち止めに走りだし、ねずみのお婆さんの手伝いなんかも、なかなかどうして熱心に務め、そんな風でしたから、森に住む動物たちはみな――へそまがりのいたち等は認めようとはしませんでしたが――猫のことが大好きなのでした。そうして何より、口にはせねど、猫も自分自身を随分誇りに思っていたものです。

さてしかし、猫には一つだけ、どう頑張ってもできないことがありました。またそれは、同時に猫の第一等の恥でした。なにかといえば、泳ぎです。元来猫というものは、魚好きでありながら、水は大の苦手としているでしょう。その例にもれず、この縞猫も、泳ぎに限ってはてんで手も足も出ませんでした。たとえば朝早くに起き出して、家の裏手の河でひっそり練習などもしてみるのですが、これがまた、まるっきり効果をなさぬようなの

です。師匠でもあればいいのに、彼は森の同胞たちにかなづちをすっかり隠し通していましたから、他人に頼ることもなりません。何日何月と経っても、猫はせいぜい、ちょっと顔を洗ってみる位のことしか、できはしませんでした。

猫はこれが悔しくて、悔しくて堪らなかったのです。

――僕はこの森で一等できる獣なはずだ。それなのに、泳ぎだけどうしてもかなわないのは、一体どういうことだろう。狭い川の流れを渡る位ならば、年端も行かぬ子ねずみにだって簡単だというじゃないか。

こう思って前足を清いせせらぎに浸してみることは、幾度となしにあったのです。けれど彼にしてみれば、波は氷のようにぎょっとするほど冷たく、しかも上流からつぎつぎ押し寄せて来るものだから、だんだん温まってくれることもありません。終いにはこのまま骨身が凍てつくとも感じられ、猫は毎回堪え切れずにとうとうぱっと逃げ出してしまうのでした。

ある晴れた日のことです。猫は長い尻尾をぴんと立て、なす事もなく、ぶらぶらと河に沿って歩いておりました。

森は上流へ行くにつれ深まってゆくのです。しっとりとした土の匂いだの、りすや小鳥やのさえずりだのが、猫の感覚をくすぐっては去り、そうして、岩のような木の幹に根、黄白くちいさなきのこの類い、またうっそうとしながらも陽に透ける蔓草が、代わるがわるに視界を通りぬけるのです。猫は実に良い気持ちになって、隣を滑る水の動きなども、ちっとも気にはなりませんでした。

そんな頃、ふいに樹を挟んだ猫の横を、風の塊のように走り過ぎたものがありました。

――長い胴に金茶の毛、いたちの奴に違いない。しかしこんな所で、一体何をしてるのか。

といっても、いたちの事となれば猫にはただ一つの理由しか思い当たりませんでした。

――さあ、何の悪だくみをしているのだ。

猫は縞の尻尾をぱっぱっと大きく揺らし、体を低くかがめて、虎視眈々といたちを見つめました。いたちは一本の楢の根元に着くなりまわりを一巡りしました。そうしてにわかにすばしこく幹を登ると、一かごの鳥の巣をくわえて、また下ってきたのです。

いたちは盗みをしたのでした。巣の中の卵は遠目からでも、瑠璃のように青く清らかな美しい光沢を帯び、生き物の体から現れたとはとても思えぬほどでした。実際、それは卵なぞではなく、河に磨かれた鉱石や、もしくは丸く割りとった海の一欠片だったのかもしれません。

しかしそうであればこそ、またそもそも、盗みはいけない事に相違ないのです。猫はごくりと息を呑んで覚悟を決めると一気に駆け出して、いたちの首根っこへ食らいつきました。突然のことにいたちはあんまりびっくりして「ぎゃあっ」と叫ぶなり巣を投げ捨ててしまったのです。それでも猫は、なかなかその悪党を解放しはしませんでした。さすがに牙はひっこめても、本来やわらかな前脚でぎゅうぎゅう圧さえつけ「馬鹿野郎、馬鹿野郎」と暴れる彼をじっとにらんでいたのです。

猫には、どこにだって本当の悪人はいるまいという信仰がありました。それでどうにか、「もう二度としないからゆるしてくれ」と、そんな改心の言葉を引き出そうと試みておりました。猫はもう幾度も、そうやってわるものをこらしめて来たのです。

しかし今度ばかりは、どうもうまく行かぬようでした。いたちがやがてぐったりしてきても、なお「おまえは

馬鹿だ」と悪罵するのを見ていると、猫はなにか虚しく憐れになって仕方ありませんでした。いたちの命は、今や猫の心持ち一つで決められるのです。だのにいたちはこうも反発して止まないのです。

猫はそのぐにぐにした体を抑えつけながら、しばらくいたちの顔をのぞきこんでいました。けれどいずれ、弱い者をむやみにいじめていると思われて、足を離してしまいました。となればいたちはもう何もいわずに、またびゅんと風の塊のように走り出すのです。そうしてそそくさと河を渡って行くいたちの後頭を、猫はただぼんやりと眺めておりました。

幸いなことに、卵の内には一つも、割れたり潰れたりしたものはありませんでした。猫がそれを拾い集めていると、やがて親の水鳥が、卵と同じ位に真っ青な風切りを閃かせ、口には床材の綿毛をくわえて帰ってきました。彼女は猫がせっせせっせ動くのを見るなり、何事かあったと察したらしく、荷を置き風鈴のようなきれいな声を鳴らして跳ね回りました。

「まあ猫さん。どうなさいましたの」

すると猫は疲れた様子などちっとも見せずににっこり笑って言いました。

「なあに。いたちの奴が持って行こうとしてたんで、ちょっと懲らしめてやったんです」

「まあ、いたちが！」

それを聞いた水鳥は目をつむって、あんまりの恐ろしさふがいなさに、しばらくはもうぶるぶると震えていたのです。

けれども再び猫のことを見上げると、

「とにかく私、お礼しなくっちゃいけませんわ。お渡しできるものも、この羽根くらいしかありませんけれど……」とガラス玉の眼をして言いました。それで肩もとにくちばしを入れて羽根を引き抜こうとしたのですが、猫があわてて、それでも優しい声で止めました。

「痛いことはよしてくださいな。僕羽根ペンも布団も足りてますから、……それよか泳ぎがおできになるんだったら——」

こうしゃべって、猫ははっと口ごもりました。

——だったら、どうか僕に教授してください。

彼は無意識のうちに、そう懇願しそうになっていたのでした。それはやっぱり歯がゆさや悔しさが、知らず識らず溢れそうになっていたのでしょう。少しきゃんな水鳥のお嬢は、すらすらと泳げてしまうように生まれついているのです。またあのすれた所のあるいたちさえ、多少ぶかっこうでも速い河を渡れるのです。猫はそんな事を思ってしまうと、自分の無能が悲しくてしかたありませんでした。

それなのに、彼は結局、泳ぎを教えてくれとはとても言い出せないのでした。頼みさえすれば、水鳥は「まあ！」などといって快く引き受けてくれることでしょう。猫にもそんなことは分りきっていたのです。けれども、もし、もし哂われでもしたら、と考えると、もう気が気ではありませんでした。

「いいえ、魚を捕っていただけませんか」

「そんなことで宜しいの？」

水鳥はくつくつ笑うと、ふうわり飛びあがって河の中の、ぼやけたとび石の上へ立ちました。そうしてじっと流れの一点を狙いすましておりましたが、突然こまのように旋回して水中に突っ込んだかと思うと、そのくちば

しにはもう立派ないわなが一匹捕らえられているのでした。それを眺める猫の心に、結局嫉妬などという余念はちっとも起きはせず、ただ憧れだけが立ち塞がっていたのです。

——僕は無能だ。

猫は自分の頬やひげやの辺りがすっと冷たくなるように思いました。それでも、そのような素振りを晒す事はとてもできませんから、「見事ですねえ」などとにっこりし、「……ああ僕そろそろお暇しなくっちゃ。お魚いただいて行きます。それじゃあどうも」

と、つむじを見せると、水鳥が「この度は本当に……」というのも上の空で聞き、やっぱり尻尾をぴんと立てて、口には魚をくわえて、また河下の自分の棲家の方へ戻って行きました。陽は少しずつ河に落ちつつあり、水面はもうずいぶん目映く光っていたのです。

猫の住むほったて小屋の中でも、夜中の空気は冷ややかでありました。猫は地面と藁の布団との間に体を挟み込んで、小屋の天井を見つめておりました。彼は正味のところ何も持ってはいないのです。この潰れかけた家の他には、ほとんど身一つばかりなのです。

——僕は水鳥さんへちょっとした嘘を吐いた。どうしてかと言えば、羽根を抜かせるのが心苦しかったからだ。善意には違いない。しかしそこに、自分を良く見せようという気持ちは少しでもなかったか……。

水鳥はきっと何にも気付かなかったことでしょう。けれども、あの一言を呑み込んだ時から、猫は自分の魂胆をすっかり判り切っているのです。

——いたちの奴をああしていじめたのも馬鹿だった。あいつはもしや、初めから僕の泳げないのを知っていたの

じゃないか。そうなら、むやみに攻撃して、言い触らされるようなことがあったなら……。

そこまで来ると、猫は自分がさもしくて仕方なく、全ての考えを反古にしてしまおうと「正義のためじゃないか。現に水鳥さんはあんなに喜んでくれたじゃないか」

とがなり立てました。するとなぜだか、涙がぽろぽろぽろぽろこぼれて来、

「僕は森で一等できる獣じゃないか。欠点を補う位の技量もあるじゃないか」

そうつぶやいてみても、結局納得してくれないのは猫自身の心だったのです。窓の外ではやはり河がゆるゆる流れ、加えて様々の星がいっぱいに蒼白く光っておりました。猫を少しでも慰めてくれるのは、彼の眼に淡くにじんで映る星々ばかりでありました。

「お星様、お星様、僕はどうしたらいいでしょう。僕はどこへ行けばいいんでしょう」

そうやってしくしくと、柔らかな頬の毛並みを涙にぬらし、光らせていたのです。

この時偶然、猫の家の側を通りかかった者がありました。いたちです。それも猫の家と知って通ったのではありません。空腹で眠れないので、何か食べ物を探して、あてもなくそこらを歩きまわっていたのです。それというのも昼間あの青い卵を食べ損ねたからでしたが、いたちは猫のことを恨んではいませんでした。むしろ日頃から、少なからず猫を羨んでいるのでした。

いたちとて、「改心」というものができるのならば、そうしたかったのです。誰に憎まれることもなく、安穏と暮らしてみたかったのです。というのに彼は、狩りの他に生き方を知りませんから、「もう二度と悪さはしない」と誓った所で、そのまま飢え死にするか、約束を破ってより憎まれるか、二つに一つしかありません。その

ような彼にしてみれば、猫はあんまり眩しくて堪りませんでした。

――ああ腹が減った。俺は損な獣に生まれたものだ。……あの時、猫はどうして俺を見逃したことだろうか。俺のようなものは、河の中へ沈めでもしてしまえば良かったが。

そうとぼとぼ行くいたちの耳に、ふとすすり泣く声が聞こえました。いたちは初めひどくぎょっとしました。けれどすぐにその出所を探し始めたのです。そうして、そのほったて小屋が見付かったのはすぐでした。

いたちはそろそろと走って行って、窓からこっそり内を覗きこんでみました。

猫は壁際に藁を敷いた中へ、滑らかな毛に屑をいっぱい付けて丸まっているのです。いたちは自分の夜目が利くのが、切なくって仕方ありませんでした。でも猫がなにかぱくぱくしゃべっているのが分かるとまた走り出し、今度は薄い壁に耳をくっ付けたのです。

「お星様、僕はどこへ行けば良いんでしょう」

猫はしくしく泣きながら、震えた、ねばついたような声でこう言いました。それを聴きとった時のいたちはどんな気持ちであったでしょう。しばらくそこにたたずんでおりましたが、やがて珍しくしゃんと座るととうとう口を開いてしまいました。

「猫さん、どうなさったんですか」

壁の向こうから息を呑む音があっても、いたちは怯みませんでした。なるたけ違う声を作ったまま、また優しくそうっと話しかけたのです。

「猫さん」

「……どなたでしょうか」

「お判りになりませんか」

いたちは自分が星であるなどと、嘘の名乗りこそしませんでしたが、そのつもりではもういたのです。猫は正体を知っているのかいないのか、ぼんやりした調子でぽつぽつ話し始めました。

「お星様、僕は森の皆々にどのように見えているんでしょうか。みんなの中には、きれいな僕の偽ものがあるんでしょうか。僕その偽ものになれないんです。失望される位なら、いっそいなくなってしまいたいんです。もうどん詰まりにいるんです。僕は善人でも正義漢でもなくって、初めから、私利私欲の塊だったんです。……」

猫がおおよそこんな事を口走るのを、いたちは黙って聴いておりました。彼は猫にそんなことを言わせた自分をひどく憎みました。また「君はこうもきれいじゃないか」と言おうとしました。しかし同時に、心の底に何かどす黒いような感情をも覚えたのです。それは憐憫や優越や、ほんとうにそういった類いのものに違いありませんでした。その鎖は、いたちを目がけて真っ直ぐ絡みついてくるのでした。いたちは焦りました。

「そんな悲観したらいけません。……昼間の親鳥もだいぶあなたに感謝していたでしょう。だから……」

その言葉は、猫が大きくしゃくり上げたので遮られ、何の意味もなく空中にこぼれました。そうして猫はいよいよ、

「僕は海底へ行きたい」とこうつぶやいたのです。

「誰も来られないような海の底へ、お星様。僕を送り届けてください」

いたちはもう、何とも言えませんでした。どす黒い鎖はすっかり彼の体を捕らえ、ついに残酷な言葉を吐かせました。

「……夜中まだ星のあるうちに海へ行きなさい。そうしたらどこまでも深く深く、泳いでゆけばいい」

「ええ」

それきり、猫はもう何も言いませんでした。いたちは「もう駄目だ」と思いました。

――俺が猫に会う事は、もう金輪際ないだろう。俺は嘘つきだ。しかし嘘だと白状しても、あいつはもう止めはしないだろう。あいつは高潔だ。もし俺が猫と生まれていたら、……。

けれどもいたちはすぐにそんな考えを軽蔑し、ちらりと一度だけその家をかえりみるなり、再び闇の中へ歩み去って行ったのです。

猫はまんじりともせずに寝床に丸まって、しばらく窓の外を見ていました。彼は星がどうこうと真面目に信じられるほど、幼くはありませんでした。しかしあの言葉に反論できるほど強くもなかったのです。彼はおもむろに立ち上がると体をふるって藁屑を落とし、河に沿って海の方へ下って行きました。

外は全てが透き通った風に、妙に静かでした。波打ち際には貝ボタンのような月が落ちて、くらくらとさざめいておりました。

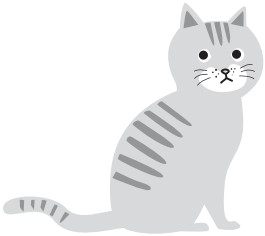
潮風はただでさえ、ひりひりと猫の鼻を打ちました。一歩波間へ進むと、一瞬間置いて、疼痛と間違う程の冷たさが猫の脚を刺しました。ですが彼はもう歩を戻そうとは思われませんでした。そうして一歩また一歩と進んで行ったのです。

――ああ、とうとう後退りできない所まで来たぞ。

水は段々と軽くなっていきました。気付けば猫の顔はすっかり海に浸かっていましたが、それでもちっとも苦しくはありませんでした。それに夜の真っ暗な海の中でも、夜目の利く猫には何もかもがすっかり見えていたの

です。
　猫は言われた通り、深く深く泳いで行きました。いつの間にやら自分の前脚が二つの硬いひれになっていても、彼は恐ろしくありませんでした。また後脚と尻尾とが一つにくっ付いてしまっても、彼は「泳ぎやすくなったぞ」としか感じなかったのです。
　そうしてただただ潜り続けるうち、ふいと目の前を魚の群れが通り、その一匹が猫を見とがめました。
「きみ、どこへ行こうとしているんだい」
「海のずっとずっと底のほうへ」
　猫がこう答えると、他の魚達も後へ続いて口々に言いました。
「海の底へ行ってどうするんだい」
「そんな所、なにもないじゃないか」
「もうそろそろ夜があけるぞ。ぼくらと浅瀬の方へ行って遊ぼうじゃないか」
　猫は口をぱくぱくさせて、どうして自分が海の底へ行きたいのか説明しようとしました。しかしそれが、脳髄に霧でもかかったように、ちっとも思い出されないのです。
　海をこんな所までやって来た彼は、もはやとうに猫ではないのでした。縞のざらざらした硬い体とひれと尾っぽとを持った一尾の魚だけが、その場へただよっているのでした。
「浅瀬はとりどりの水草やさんごや、それになかまも大勢いて、それはもうおもしろい所だぜ。ね、行こうよ」
　彼はしばらく、名前の分からない感情にもじもじ悩んでおりました。ですがいずれどうでも良いように感じられて来、

「うん、浅瀬はゆかいだろうねえ」

そう言って尾っぽをくねらせるなり、彼らの後について、浅瀬の方へと泳いで行ってしまいました。以来、彼が想念に苦しめられることはもうありませんでした。

こうして、猫鮫という生きものはうまれたのです。夜明けの空に残った明星だけが、ちかちか光りながら、白んでいく海を見つめておりました。